

## 地中海古代都市の研究 (109)

## メッセネのアスクレピオス神域調査2001 (1) - ストア遺構の概要

正会員 ○吉武隆一<sup>3)</sup> 伊藤重剛<sup>1)</sup> 林田義伸<sup>2)</sup> 島田啓<sup>3)</sup>

## 1. はじめに

熊本大学の調査隊は、2001年の調査において、メッセネのアスクレピオス神域にあるストアを実測調査した。アスクレピオス神域はオランダスによって、1957年から1974年にかけて組織的な発掘調査が行われたが、最終的な発掘報告書は出版されていない。<sup>1)</sup> 現在の遺構の大半は、この時の発掘によって出土したものである。本稿は、この神域を構成するストア遺構について、その概要を報告する。

実測は、トータルステーションを用いてストアの正面円柱(外部円柱)、内部円柱、後壁に沿って基準線を引き、エスロンテープ、コンベックス、曲尺、下げ振りをを用いて基準線からのオフセット量を測る方法で行い、遺構の平面図を50分の1の縮尺で作成した。立・断面図は、写真測量によってオルソ画像をつくり、これとレベルによって測量した基準点の標高をもとにして図面を作成した。また、ストア周囲に残る部材については、コンベックス、曲尺、直尺を用いて実測し、10分の1の縮尺で図面を作成した。

## 2. アスクレピオス神域の概要

アスクレピオス神域は、メッセネ市域のほぼ中央に位置し、北側に隣接するアゴラと共に公共生活の中心であったと思われる。神域から200mほど南には、スタディオンやパラエストラなどからなるギムナシオンがある。神域は、平面が矩形(最大で東西約100m、南北約95m)で、中央の中庭にアスクレピオス神殿と祭壇がある。中庭を四方からストアが取り囲み、その外側に部屋が設けられている。神域の東側にはエクレスシアステリオン(民会場)、プロピロン、プーレウテリオン(議事堂)がある。西側には大小8つの部屋があり、北側には中央を階段付きのプロピロンによって分けられたセバステイオンと呼ばれる大きな部屋がある。また南側にはヘレニズム期の浴場とヘロオン(英雄殿)が残っている。(図1)

神域全体は南北方向の緩やかな斜面上に建設されている。東ストアと北ストアの一部、および南ストアの東側は岩盤の上に直接建設されており、南東ストアの壁の後ろ側

は岩盤が露出しているのが観察される。一方、南ストアの西側は、砂岩の基礎が高く積み上げてあり、その上に建設されている。

中庭を取り囲む4つのストアは、いずれも2列の列柱をもつコリント式ストアで、南北のストアは約52m、東西のストアは約47m(正面円柱の基壇の長さ)である。列柱は、全体として基壇までしか残っていないが、後壁は、北ストア全体と東ストア北側が良く残っており、一部は上部まで確認できる。

各々のストアは、南北と東西のスタイロペイト上の長さがほぼ等しいことから、およそ直角をなしていると思われる。使用されている石材は、石灰岩と砂岩である。

年代については、まだ研究途中ではっきりしないが、紀元前216/5年頃と推定されている。<sup>2)</sup>

## 3. ストア遺構各部の現状

1) 基壇 正面円柱の基壇は、クレピス、スタイロペイトの2段からなる。正面円柱のユーティンテリアは、クレピスの下にあるが、前面に排水溝があるため直接その状態を観察することは難しい。クレピスは、北ストアの中央部分と南西隅部分を除いて大方残っている。一方スタイロペイトはほとんど破壊されており、各ストアの4隅とその周辺に残存するだけである。(図2)

## 2) 排水設備

中庭には、正面円柱に沿って排水溝が残っている。この排水溝は北東隅から南西隅に向かって流れるよう、勾配が付いている。北東隅には、ストアの後ろ側に隣接する小部屋から繋がる地中の配水管があつて、中庭の排水溝に流れ込む仕組みになっている。同様に、南西隅にはストアの外に向かって排水する小さなトンネルがある。各面の排水溝は、それぞれ4つの沈殿槽を持ち、何れも平面が楕円形をして、大きさもほぼ同じである。この沈殿槽は、南北と東西でほぼ対称な位置に造られている。排水溝は石灰岩で出来ており、沈殿槽は排水溝の一部材を彫って造られている。

3) 床 ストア内部の床面は、現在土で覆われているが数

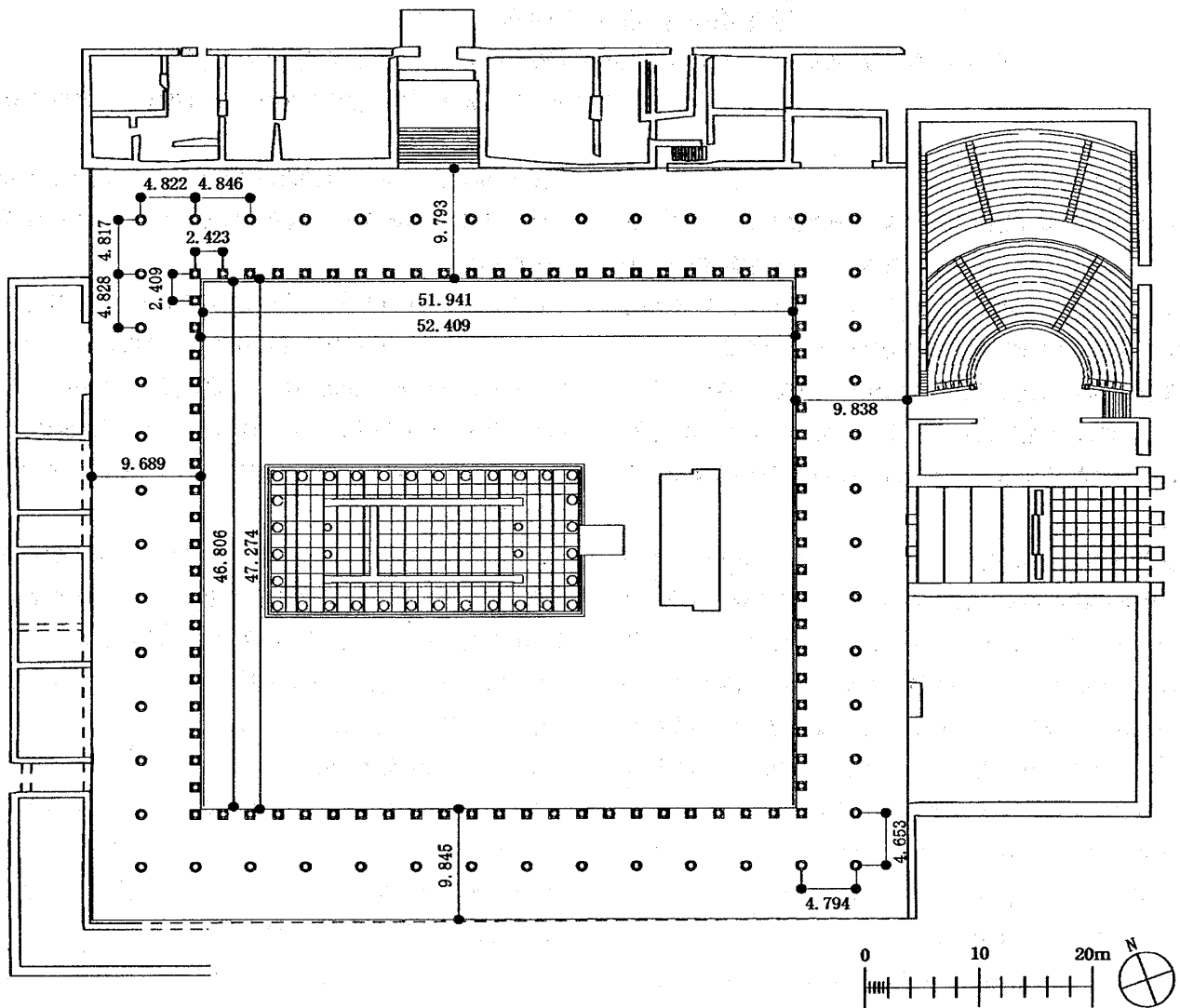


図1 アスクレピオス神域平面図

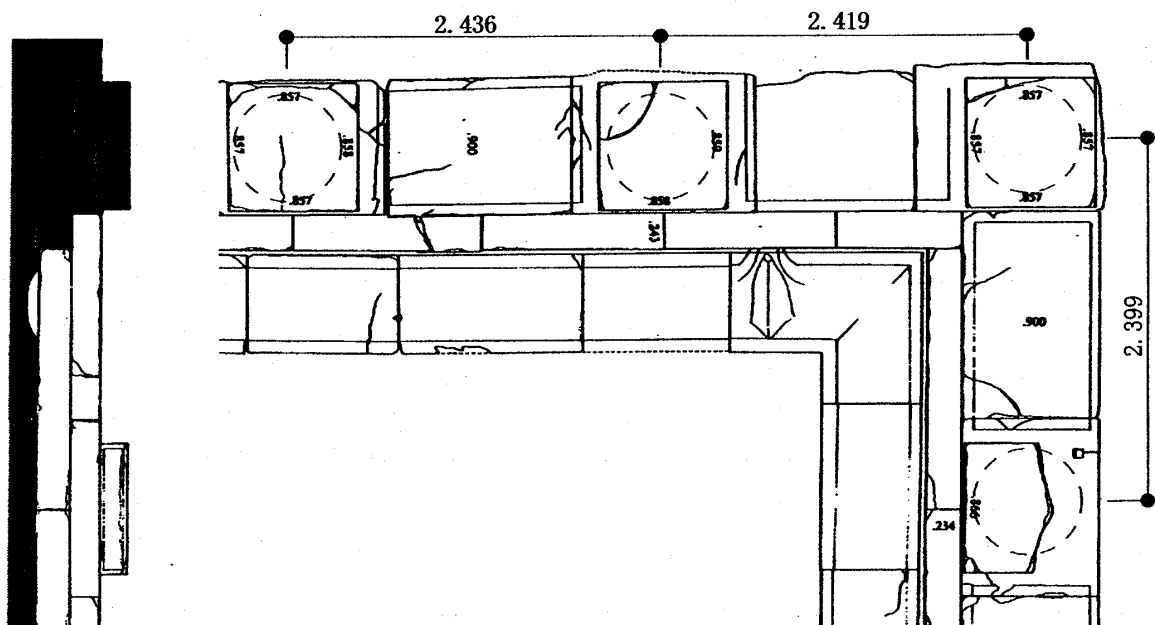


図2 北東隅基壇詳細図

センチ掘ると大きさの揃った小石が確認できた。小石の混じったスタッコで仕上げていたことも考えられるが、確かではない。また、各ストアとも床全体が中庭に向かってわずかに傾斜しており、その傾斜の程度はどのストアでも似かよっている。従って地盤が隆起して中庭側に傾いているのではなく、もともと床が少し傾斜した状態で造られたと考えられる。<sup>3)</sup>

4) 壁 スストアの後壁は、下から順に基礎、トイコベイト、オルソスタット、及び表面を粗くした切石の整層積みで構成されており、トイコベイトから上は石灰岩である。北・東・西ストアの後壁は、ストアに面する建物の壁と一体化しており、東ストアのエクレシアステリオンやブーレウテリオンに隣接する壁は厚くなっている。また南ストアの壁の背面にはバットレスがあった。

ストアに面する部屋の出入口は、基壇が平面上でストア側に数センチ出しており、これはストアに面する全ての出入口でみられる。出入口の両端には柱型があり、この部材の材質は砂岩で、仕上げのスタッコが残っている。

オルソスタットには、目地の左側または右側に引き込み目地が刻まれている。北ストアの西側には、オルソスタットの上部にある平らな部材と整層積みの切石の一部にスタッコが残っている。また北東隅に隣接する小部屋は、ストア後壁と同じ石積みの壁があり、ここにもスタッコが残っていることから、全ての後壁がスタッコで仕上げられたと考えられる。

北東隅の壁の上面には、ストアの木造の梁または桁が乗っていたと思われる痕跡があった。

5) 地表に倒れた部材 中庭の祭壇東側と神殿西側には、ストアの外部円柱のオーダー上部が一行に倒れた状態で残っている。おそらく地震等の水平応力を受けて倒れたものと思われる。



写真1 北東隅スタイロベート

#### 4. 周囲に残る部材の現状

アスクレピオス神域とその周辺には、多くの部材が出土している。ストア遺構付近に残された部材の内、ストアに属すると考えられる部材を、今回222個確認した。材質は柱礎からコーニスまで砂岩、プリンスとシーマは石灰岩である。

1) プリンス 柱は基壇の上にプリンスを置き、その上に柱礎を載せている。外部柱のプリンスは平面がほぼ正方形で、その側面にはわずかな膨らみが施されている。一方内部円柱のプリンスは、平面が円形をしており、装飾等はない。

2) 円柱 このストアの円柱は、コリント式でありながらフルートが20本である。フルートは、通常のフルートとは異なる胡麻殻フルート<sup>4)</sup>のものがある。

3) 柱礎 柱礎は柱身の一部が一体化し、一つの部材になっている。この柱身の直径<sup>5)</sup>とフルートの形状によって大きく2つにグループ化できる。すなわち、直径が大きく20条すべてのフルートが胡麻殻フルートである柱礎(Aタイプ)と、直径が小さく20条のうち11条に胡麻殻フルート、残りの9条に通常のフルートが付く柱礎(Dタイプ)が存在する。一般に胡麻殻フルートのある列柱では、通常のフルートのある面が最も外側の目に付く場所に置かれる。従って、Dタイプは正面円柱に、Aタイプは内部円柱に属するものと思われる。

柱礎にはトルス・スコティア・トルスの順序にアッティカ式モールディングが付いている。上面にだぼの痕が認められる部材もあった。

4) 柱身 柱礎から柱頭にかけて円柱全体を復原できるような部材は発見できなかった。しかし柱礎と同様、フルートの形状によって5種類にタイプ分け出来る。

まず、すべてのフルートが胡麻殻フルートであるドラム

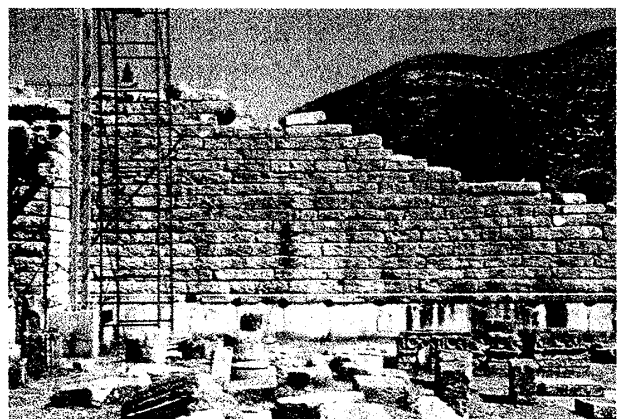


写真2 北東の後壁

(タイプA) とすべてのフルートが通常のフルートであるドラム (タイプC) がある。次に、上下と前後に胡麻殻フルートが付くものがある。すなわち、柱身の下部が胡麻殻フルートで上部が通常のフルートをもつドラム (タイプB) と、20条のフルートのうち11条が通常のフルートで残り9条が胡麻殻フルートをもつドラム (タイプD) である。さらにこのタイプBとタイプDを組み合わせたタイプ、つまり20条のフルートのうち下部の11条は胡麻殻フルートで、上部を含めた残りは通常のフルートをもつドラム (タイプE) がある。

ここで、Dタイプの柱礎が正面円柱にあたるのが分かっている。正面円柱の柱身に付くフルートは、20条のうち11条が胡麻殻フルートのタイプであると推定できる。同様に内部円柱も、Aタイプの柱礎であるから、柱身に付くフルートは20条すべてが胡麻殻フルートのタイプであると推定できる。従って、正面円柱は、Dタイプの柱礎の上にDタイプのドラムが乗り、さらにAタイプのドラムが上に乗ることになる。また内部円柱は、Aタイプの柱礎の上にAタイプのドラムが、さらにその上にBタイプが乗る。

Cタイプのドラムは確認された数も多く、また円柱下部直径から推測される円柱高さからして、胡麻殻フルートの付くドラムの上に、それぞれ2つ乗っていたのであろう。

つまり正面円柱と内部円柱の柱身は、それぞれ4つのドラムから構成され、下から1/3程の高さまで胡麻殻フルートが施されていた。但し、正面円柱の中庭に面する9条のフルートのみは通常のフルートで仕上げていた。

また、ドラムの端部側面に銚が、上面にだぼ穴がある部材があった。

5) 柱頭 遺構付近に残された柱頭は、各々形状が違うが、ヴォリュート (渦) の有無とアーカンサスの葉の数によって大きく2種類に分類できる。ヴォリュートがあってアーカンサスの葉が12枚の柱頭は、全体として小さく、逆にヴォリュートがなくアーカンサスの葉が8枚の柱頭は、全体として大きい。ここで、正面円柱の柱礎は直径が小さく内部円柱の柱礎は直径が大きいことから、小さな柱頭が正面円柱に、大きな柱頭が内部円柱に属することが推測できる。また側面中央部分にエロスの彫刻があるものがあるが、その形や大きさは様々である。

柱頭上面には円形の凸部があって、これはアーキトレブを乗せるためのものと思われる。

6) エンタブラチュア アーキトレブとフリーズは1つの石材で作られているので、ここではこの部材を便宜上エンタブラチュアと呼ぶ。エンタブラチュアのフリーズ部分には牛の頭部と盃が交互に並ぶ浮彫が施されている。この牛の頭部は各ストアに100頭分並べて、中庭中央の神殿 (アスクレピオス神あるいは女神メッセネ) に捧げる意図があったらしい。また1つだけ石灰岩のエンタブラチュア部材が存在したが、ストアに属するものか等不明な点が多い。

7) バッカー 高さはアーキトレブよりやや高く、上面にはエンタブラチュア背面と接合する銚がある。

8) コーニス 正面にはデンティル (歯形飾) が施してあり、背面に垂木がのりと思われる凹みがある部材があった。

9) シーマ 正面にライオン頭部と蔓の浮彫があり、上面に屋根瓦と軒瓦が乗るための痕跡があった。

## 5. まとめ

以上アスクレピオス神域のストア遺構と解体部材について、主に形状に即して報告した。次稿では実測によって得られた各部寸法を、やや詳細に報告する。

謝辞 本研究は平成13年度の文部省科学研究費補助金基盤研究(A)(2)海外学術調査(課題番号11691154)の助成を得た。遺構の写真測量については、(有)宮塚文化財研究所の協力を頂いた。ここに記して謝意を表す。

注

1) オランダスの発掘に関しては Orlandos A. K. "Excavation of Messen" Ergon, 1958, pp. 142-146; 1959, pp. 110-117; 1960, pp. 159-167; 1962, pp. 119-124; 1963, pp. 88-102; 1964, pp. 90-101, 1969, pp. 97-132; 1970, pp. 119-127; 1971, pp. 145-163; 1972, pp. 67-80; 1973, pp. 79-82.

2) P. G. Themelis, Ancient Messene - Site and Monuments, p. 17

3) 詳しくは、次稿を参照。

林田義伸他、『地中海古代都市の研究 (110) メッセネのアスクレピオス神域の調査2001 (2) - ストアの各部寸法』

4) 胡麻殻線形のフルート (reeded flute) は、通常のフルートとは逆に、アリス間で外側に膨らんでいる。ストアのような、一般に柱が人の手に触れやすい建物の円柱に多くみられる。

5) ここ言う直径は円柱下部直径をさす。イオニア式やコリント式オーダーの場合、柱礎があるために、どの位置を円柱下部直径とするかべきか、判断が難しい。今回は柱礎に付属する柱身が、トルスの終わる位置からやや立ち上がって、緩やかなカーブがほぼ終わりきった位置を円柱下部直径とした。

1) 熊本大学助教授 工博  
2) 都城工業高等専門学校教授 博(工)  
3) 熊本大学大学院自然科学研究科

Assoc. Prof., Kumamoto University, Dr. Eng.  
Prof., Miyakonojo National College of Technology, Dr. Eng.  
Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University